

## 潮騒

清水一美

まどろみの中に聞いた雷鳴に、魂はきつと星座の象る神話の世界へ星巡りに飛翔し、目覚めの朝には翼を休めた朝露の煌めきに命の瞬きと忘却の川に身を委ね、その意味も深く堆積する私の地層に浸透していつてしまうものようです。指差しなぞったその地位も、堆積する私に化石し、意味を刻んだ契約の板は、果たしてどの地層に眠っているものなのか。契約の言葉、果たしてそれを証する預言はいずれの星座に求められるべきか。……

### 雷鳴

進路が気掛かりな中学三年の夏休みに、担任のブスの提案により私たちは、地元の太平洋に臨むT海岸で一泊二日のキャンプをすることになりました。

ブスとは私たちの地方で蟹をいい、新任のS教諭がなぜ前任地でブスとよばれたか、そのいわれはもはや私の記憶の砂地に何の潮痕も残しておりません。ですが、私たちは、新学年のホームルームで自ら渾名を明かしたS教諭を信任し、そのままよぶようになったのです。キャンプに先立ち、学年で中間辺りの成績を上り下りしている剽軽が取り柄の私は、キャンプという言葉すら初めてなのに、クラス委員や成績優秀なIやSらと実行委員に加わる榮譽を得、放課後に残って計画を立てることになったのです。クラス委員には、Yがおりました。

Yが私のささやかな人生に標したのは、中学に上がった年、同じクラスになったのが初めわかさの分去れでした。しかし、その歩みはごくゆっくりしたもので、気掛かりな女子、そうした違和感しか持てなかった。

中学一年のあるとき、同じクラスの女子から、二人がかりで友達となるよう詰め寄られたことがありました。しかし、私にはその意味が分からない。クラスメートとして、仲良くしていればいいのだろう。それ位にしか思えなかったのです。

そんな私ですから、二年のクラス替えてYと別々になると、初めの内こそ廊下ですれ違ったときなど、その顔を盗み見もしていたのでしようが、同じ階に教室を並べていながら、Yと出会ったという記憶があまりない。してみると、私は、昇る太陽につれ朝霧が晴れていくように、Yが私の識域から退潮するにまかせていたのではないか。ところが、三年のクラス替えて再び机を並べることになり、その一年のブランクが、却ってYの女性を私に顕現させたようなのです。

始業式の後のホームルームで、まず担任のS教諭が自らの渾名を紹介し、それから出席番号順に自己紹介が始まり、私の前に自己紹介するYの口から出る言葉の一つ一つを、私は牢記しようと思いました。家族構成、父親の仕事、趣味。一年のときも、おそらく同じことを紹介していたのでしよう。ですが、それは、全く私の記憶の水平線の外でした。

そして、私の番が回ってきました。私はYに倣って自己紹介をし、その間何度となくクラスを受けを見るふりをして、Yの笑顔を確認せずにはおれませんでした。

そうした私が、一分でも長くYと一緒にいられるキャンプの実行委員に選ばれたのは、望外の幸というものでした。

ところで、IやSとの出会いは、その年の春クラス替えて近しい友のいなくなった積極的でない私を、修学旅行の班分けでIが誘い、同じ班になったのがきっかけでした。彼らとの出会いは、私にとって一つの脱皮でした。彼らと付き合う前は、小学校時代の古い友達付き合いをしていたのですが、IやSと知己を深める内にそれまでの付き合いから遠ざかり、彼らの影響の下、その後の私を形成する嗜好に劇的な変化をもたらすことになったのです。つまり、漫画から小説や詩の世界へ。歌謡曲からロックやクラシックへ。さらに、私にとって何より大きな彼らによる変化とは、Yとの距離が縮んだことです。

夏休みまであとわずかと迫った七月のある日の放課後、二回目の会合が開かれました。

一回目はブスも臨席して、ホームルームで言ったキャンプの主旨を繰り返し、場所の選定でまごつく私たちに地元のT海岸を提示すると、対抗場所も出ず、決に至りました。

「後の細かいことは、お前たちで決めるんだ」

やんわりとしたブスの言いの裏では、実行委員としての自覚を促していたようです。

二回目の議題は、食事のメニューと材料調達。事前に会合の連絡があったにも拘らず、キャンプ料理の情報を入手することすら思いつかない人任せの私には、議題に有益な提案の持ち合わせなどあるはずもなく、議論を活発にする冗談や洒落をもって臨むより、面目の施しようもありません。

「話し合うまでもなく、俺らの海岸でキャンプなら、苺煮だな。材料だって現地調達でき  
るし」

Iが、何かの切り抜き写真を提示しました。

「おお、それがいい。イチゴニだな」

郷土料理である苺煮の何たるかを、私は知りませんでした。けれども、私にはIの提案に相乗することで議場を賑すより頭が回らない。私同様、実行委員の幾人が苺煮を知っていたか、それはもはや問う術ありませんが、中学生が思いつきそうなキャンペーンの定番メニューの意表をつかれ、目からうろこが落ちたように、それからひとしきり、どこでその名を知ったのか。パエリア、ペスカトーレなど海産物を使った料理名が俎上に載せられた。

「材料はどうするんだ」

「海岸にゴロゴロしているし、現地調達だってできるから大丈夫だ」

「作り方は分かるのか」

「レシピなら図書館で調べられる」

ブスが臨席しない議場は、紛糾が深まる一方で、

「あんたたち、いい加減にして、早く済ませましょうよ」

とうとう、Yが怒った。Yの叱責を受けて、議事は進行するかに見えました。が、それもつかの間。議事が在り来りに随すると、またもや苺煮から一連の亡霊が跋扈してくる。もはや、Yも呆れたものか、溜息を吐いたなり、私たちには取り合おうとしなくなってしまうました。

やがて、教室に陰りが忍び入り、窓を額縁に一枚の絵と映えていた日岳は、とうに主題を黒い雲に譲り、窓に画された空を涙目の黒雲が覆い出していくと、

「やばい。おれ、傘持ってきていないぜ」

Iが真顔で、心配をし、

「それじゃ、早く終わらせることね」

すかさず、Yが澄まして仇を討つのです。

「おお、そうしようぜ」

それからのIは、顔の表情も苺煮を提案したときと違い、現実的にことを進めていく可能な実行委員の顔となり、私を面食らわせるのです。

Iにしてみれば、在り来たりを議論するよりも、自分たちの独創を試してみたかったのでしょう。実際、海産物の豊かな土地で、もし苺煮が立案され、実行に移されたなら、クラスの多くの者は、地元を開眼するだけでない。地方都市としては類型的ながら、中央志向による没個性の表層の下に息づく埋もれた独自の文化に自信と誇りを持つに至ったかもしれない。しかし、議場は、Iの思惑と外れ、興味本位のでたために走ってしまい、それに見切りをつける意味でも、Yの揶揄は有効に時宜を得、それに応えたIがYも呆れるほ

どに話をどンドン進めていった。そういうことだったのでしよう。

そうした思惑をあざ笑うかのように、空が喉を鳴らし始め、湿った風にかすかに土の匂いを嗅いだと思うと、大粒の雨が勢い良く大地を叩き始め、

「しまった」

Iの芝居じみた舌打ちが、心地よく私の耳を打ち、天に嘯くような舌打ちを嘲笑うかのように、雨音があつという間に教室を跳梁していった。

「でも、良かったじゃないの。表にいるときじゃなくて」

Yが、Iを慰めました。Iはおどけて肩を竦めてみせ、Yは他のクラス委員たちとブスに報告をするために職員室へ向かいました。

閑散とした教室では、各自が勝手に標榜しておりました。

年寄りが「山」と呼ぶ、森を切り拓いた畑の広がる丘陵に学校は建っていました。市街地のベッドタウンとして開発の進む丘の緩い傾斜なりに、団地や住宅が丸い丘陵を四角く区切り、人間の営みの意志を天に誇示していましたが、まだ畑や雑草茂る空き地が多く残り、その奥にはかつての「山」の名残を留める森が、驟雨の紗を纏い、啓示を待つ隠者のように、隠然と結跏しております。と、突然天が裂け、その亀裂が地に達し、寸刻の押し殺した沈黙の後、凄まじい破裂音が乾坤を揺るがした。

「すげえ。おい、I」

脇で声が上がりました。Sです。自席で本を読んでいたIが、Sの脇に立ちました。

「天啓って、こんなのかしら……」

今度は、後ろで声がありました。いつの間に戻っていたのか、それはYです。

「テンケイ……」

Yは私の方を見ずに、言葉を継ぎました。

「目を覚ましなさいって、呼ばれているみたい……」

「……」

黙っている私に、Yは私の方を向き、

「本当の自分って、ほかにあるような気がしない」

そう言う時、Yは曖昧な笑みを浮かべたのです。

考えたこともないことです。第一私には天啓という言葉が分からないばかりか、初めて直視しえたYの告白に肩透かしをくらい、当惑交じりの失望を覚えただけなのです。

「そうだよなあ」

Iでした。縋る思いで私はIを見、預言を待ちました。

「この世のことは、真理を顕す言葉による置き換えだっていうし……。真実自分の言葉を

捉えるには、世の中急かされてばかりだしな……」

Iが哲学の類の本を読んでいるのは知っていましたが、それまで上ったこともない話題でした。Iの話にさらに混迷を深めた私は、Yの顔を盗み見、そうしていつかYそのものでもあるかのような、口元の小さなほくろに魅せられていたのです。

「ほら、また……」

Yの唇が動き、はっとして私は、目覚めのようにYの視線を追った。そこには、Yの目に映った昇り立つ竜の、残像曳く暗い空があるだけで、後には、その咆哮のような雷鳴が、空を翔けていったのです。

## 潮騒

キャンプ当日、実行委員の私は、肉体労働をもって面目を施しました。とはいえ、家でも手伝いらしいことをせず、甘えて育った私に満足な働きなどできるはずありません。

「おい、そっちの張り綱、もつとしっかり張らないと」

Iは、その辺も良くできるのです。私はどうしていいのかわからないながら、見よう見まねで、何とかしのいでおりました。

キャンプ場のあるT海岸は、私たちの最寄りの駅から鉄道で十五分ほどのところにあります。しかし、それまで私は、途中のS海水浴場へは行ったことがあるものの、その先へは行ったことはありません。ですから、初めて目にした太平洋に臨んだ天然芝の開放的な美しさに、これが自分たちの郷里かと、見直す思いがしたものです。

やがてテントを張り終え、私たちは計画通り野外研究のため、磯に泳ぎに行くことになりました。私は着替えの手間を省き、家を出る前に海パンをはいてきておりました。Iや多くの男子、また何人かの女子も同様のようでしたが、Yを始め女子の多くは現地に着替えをするつもりだったようで、テントに入っていくのです。そんな女子を素知らぬ風を装い私はいえ、そのころようやく三大欲望の名に恥じぬ勢いを増してきた性欲の煽りで、その着替えに妄想を逞しくし、血を騒がせるはめに陥りました。とはいえ、そこはまだ子供なのか、一旦海に入ってしまうえば、波と戯れ小魚を追いつくのに夢中な私ではありませんでした。

晩の食事も、Yの叱責を喰らっても容易に決まらなかったのにもかかわらず、カレーと豚汁で落着し、手際もみんな心得たものでした。私は初めて経験するキャンプの食事に、その年の修学旅行以来の興奮と満足を覚えておりました。Iもそうした心情は同じものなのか、はしゃいで場を盛り上げるのです。Yは普段でも明るい性質ではありましたが、そ

のときは人が違ったように、IやSの冗談にも応酬していたのです。

食事の後は、ファイヤーサークルでのキャンプファイヤーに花火大会でした。そこでもYは、はしゃいでいた。

「どうしたんだろうな、Yは」

私がIに耳打ちをすると、

「え、何が」

Y以上にはしゃいでいたIには、Yの素振りも目に入らないものなのか、意に介していないようなのです。

「何がって、Yのはしゃぎ振りだよ」

「何でもないだろう」

そんなことを、と言いたげなIの口です。

「学校じゃ副委員長。家ではお姉さん。そして、今や受験生。そうしたがらみから、解放されたいだけじゃないの」

言われてみれば、Iの言う通りです。しっかりしているように見えても、Yはまだ中学三年の女の子。自分と同じということに気付かされて、我ながら己の迂闊に呆れました。

夏の夜空に花火は彩を添え、私たち中学の最後の夏の軌跡を描いております。Yの笑顔はキャンプファイヤーと花火にも鮮やかな陰影を刻み、誰かに見咎められるのを恐れて盗み見る私に、この世の好ましさと真理とを垣間見せるようです。

上がる歓声の合間にも、潮騒が聞こえてくる。それは物心つく以前から、私の生活の基調に通奏低音のように流れていました。クラスの多くが、おそらく同様だったでしょう。

ですが、そんなものに感傷を示す者などいないかのように、それぞれが、つかの間の花火の光芒と化していたのです。

「どうしたの、Hちゃん」

Yでした。私の名前が女の子のようなものだから、Yは好んで私を「ちゃん」付けでよんでいたのです。くすぐったい思いを押し殺し、

「いや、潮騒が……」

と言い惑う私の横顔を見つめるYの眼差しを、痛いほどに感じました。

「潮騒……」

Yはそう言って、耳を澄ませました。そのとき私は、何だか初めてYの顔を側でじっと見たような気がしたのです。

「静かね……。初めて」

そう言うYの直視が、私を貫きました。気のせいか、笑みを象る目に不思議な艶が籠も

っているようです。

「何が……」

気圧されて、やっとなした返答でした。

「海の呼び声を聞くのなんて……」

そう言うと、Yはくすつと笑いを漏らした。

海の呼び声、Yはそう言いました。私には潮騒でしかないものが、Yには意味をなす声と聞こえたのでしょうか。それとも、Yの感傷だったのか。そのとき、呼び声という言葉に触発され、記憶に立ち上がってくるYの眼差しを、私はまざまざと甦らせていたのです。

夕立で教室に残るのを余儀なくされたあるとき、「本当の自分」と言って、怖がりもせず雷を追っていたその眼差しを。嬉々としてというよりも、むしろ恐ろしさを堪えて、それを追い求めていた真摯なそれを。

やがてキャンプファイヤーも終わり、就寝時間後にIとS、それに学級委員長のNと私とがファイヤーサークルで月明かりに濡れておりました。穏やかな潮騒が、悠久の旋律を奏でておりました。私らが存在するよりも遙か昔から、それは同じ韻律を結んでいる。その思いが、自分の外にある久遠の世界を偲ばせ、Iが言った「真理」を思わせるのです。

「知っているか」

Nが身を乗り出して、挑んできました。月明かりにも、その目が好奇に輝いているのが分かります。

「女には穴が三つあって、その一つは海に通じているって」

余りにも唐突な、Nの口でした。

「何だよ、いきなり」

Nの挑発に、私はたじろぎました。Nは私が面食らったのがおかしいらしく、身を反らし声は立てずに笑うのです。

そのころ私は、兄の週刊誌を盗み見ては己の稚拙な好奇心を満たしておりました。そこに載っている女の子の裸に、その具体的な女の性を想像することなど無理な相談です。しかし、Nの新知識の不意打ちに妄想の煽りを受け、不覚にも血の逆上せに戸惑い、面食らった反動で不機嫌になった己の未熟を恥じた私は、何とかNに一矢を報いようと、

「だから、女は海の声を聞き分けるのだろう」

と、嘯いたのです。

性への興味はあってもそれを積極的に表現できない奥手な私は、Yと平気で話ができるN、あるいはIやSに密かな羨望を抱いておりました。私は彼らの頭脳の前に引け目を感じ、彼らの趣向に属していこうと爪立つ思いもしていた。しかし、そのとき私は、虚言を

弄したとは思いませんでした。それどころか、不可思議な実感をすら享受していたのです。それは、Yと秘密を共有できたとの思いからでしょう。すでに私はYの言葉を理解し、いずれ海がその秘密を私にも明かすだけではない。その秘密の共有が、Yと私の結び付きを保証するもののように思えてくるのです。

「おい、浜へ行ってみないか」

Iがいつの間にか、懐中電灯を用意していました。

Iを先頭に、私たちは恐々夜の浜道を辿りました。開けた所では、月明かりだけで十分歩けるのです。が、黒松の防風林の中では、意識を浸食してくる闇に取り込まれ、上下の感覚を失する眩惑に陥る。自分という個体が、いかにその存在を感覚的に周りの事物に依存しているものか。闇は、私の地盤を揺るがすことで私たちを再確認させ、他在との関係を調和させるべく臨在しているものようです。

Iの先導で、どうにか私たちは浜辺に辿り着きました。キャンプ場からは数分だったのでしょうが、無限の時間と空間を経たようにも思えました。

目の前には月明かりに海が渺とした広がりを見せ、かつて誰かであった死者を忘我へ誘う無明の帳で覆う黄泉さながら、無数の呼び声を集めた潮騒と共に寄せかつ引いております。黄泉……。そんないふを抱かせるほどに、昼見る姿の異相を現した海は、生命に至る性への好奇心とは異質ながら、同じ比重の力をもって私の目を惹き付けてくるのです。いえ。死と言い生と言う。対語のように使われるそれは、実はどちらかが欠けても成立しない関係にある。であれば、生と性は同次元の言語とすると、性は死と同義語なのかもしれない。と、不確かな波間に、Yの影を見たような気がしました。途端、私の体に電気が走った。

Yの影が立った波は、何事もなかったかのように浜に打ち寄せ、退いていきます。幻を追って茫然としていると、ふいとある思いが立ち上がってくる。Yは海の呼び声を聞いた。海がYを呼んだのです。その呼び声にYの本当の姿が、今こうして波の間に立ったのではなかったか、と。……

——その一つは、海に通じている

Nの声が、耳に潮引いていきました。そのとき、再び私の体に電気が流れたのです。生命を育む海が女の性に通じているとすれば、女の異相は、あるいは、黄泉。海が生み成し、恵むほどに女は豊穡であり、海が奪いかつ与え、死を単に破壊で終わらせることがないほどにも、慈悲に充ちている。そのように女も命を生み成し、その異相において黄泉をも体現しているのだとすれば、その本質において、豊穡と慈悲こそがこの生命を育むもの。死は終りではなく継承……。そう思い至ったとき、まざまざと蘇ってきた真摯なYの直視



が、私を貫いてくるのです。本当の自分と希求しながら……。

「……」

卒然として、私を呼ぶ声が全身を貫いた。上げ潮と私の識域を浸しながら、それは波動を強めてくるのです。時に母の声となり、時にYの声となって私を嘉するように。……懐かしいその響きは、やがて意識の水平線へ引き潮と遠ざかり、後には潮騒が、浜辺に寄せ、かつ引いておりました。

「おい、H。おまえも来ないか」

声に目を向けると、波打ち際にIとS、それとNが裸で立っていました。彼らは、笑いながら泳ぎだしました。波間に不確かな飛沫を上げる白い膚を、こみ上げてくる愉悦とともに私も追ったのです。

## 白雲

その朝は昨日を映して明けたのに、全く違っておりました。卒業式……。その式典が、背を押す焦りを覚えさせてくるのです。そう、その日がYとの最後の日でした。そればかりか、そのころやっつきだした自覚が、じきに始まる高校生活に旭日が刻む陰影を、私の胸に刻んでくるのです。急ぎ立てる光陰に、私はいつもの登校時間を待っていられなくなり、早く家を出、三年間通った「山」を、昔日の紛失物を探すように歩いたのです。

あの空き地、この畑。ああ、新しい家が建つのか……。と。三月の柔らかな日差しの下、青い肌に残雪の白を斑に戴いたH岳を南の空に見、湧き立つ春の息吹の中、踏みしめる一步にIやS、何よりもYとの一年を重ねていました。

——結婚して、平凡な主婦をやっているでしょう

卒業文集に寄せた、Yの「私の十年後」です。意外でした。Yの思い描く将来の平凡なのに……。私は、Yはもちろん、IやSともそのような話をしたことのない迂闊に、惜陰を知るに遅かったのを切なかりました。

卒業文集編纂に当たり、例によってIとS、それと私がクラス委員と名誉の名を連ねることになり、数日前に綴じ終えたインクの匂いの濃いガリ版刷りの冊子を手にしたとき、編纂中に読まれるのを嫌がっていたYのそれを、出来を確かめる振りをして盗み見たのです。

「平凡な主婦か……」

私は、成長したYの姿を思い描く想像力に欠けていながらも、誰かを想定した結婚というYの言葉に、動揺を禁じえませんでした。

後ろのドアから教室に入ると、私はまずYを探しました。祝祭的な空気に浮き立つ教室の最前列のKの席で、Yは仲良しのTとともに立ち話をしております。三人共に笑っているのを、私は不思議なものを見るような思いで、数瞬眼を留めずにおれません。一方では、Yが私に気付き目を向けやしないか、そんな期待も抱いていたのです。が、そうやってYを盗み見ているのを誰かに見咎められるのを恐れる小心の私には、気持ちをYに残し、自分の席に着くより外ありません。

すぐに人の気配がし、見るとそれはYでした。後ろには、Tが随っています。

「ねえ、Hちゃん」

Yが、遠慮がちに笑うのです。十年後を予告する笑みに気圧されながらも、私は男らしく運命を受け入れるべく、Yの目を直視しました。

「Iさんたちとも話したんだけど」

そこで、私の期待は終わりです。Iの愛称は、苗字の最初の漢字に「さん」付けでよんでおりました。

「Kちゃんが就職で東京へ行っちゃうの、知っているでしょ」

そのことなら、年の初めにKの父親が事故で亡くなり、進路に微妙な潮の流れる中、つてを頼って何とか東京に就職先を得、そこから夜学に通うことに決まったと、文集編纂の席でブスが安堵したことでした。私は黙って頷きました。

「みんなで駅まで見送りに行かないかって、話をしているの。どう」

「見送り。いいんじゃないの」

「じゃ、Hちゃん、OKね」

頷いて了承を示すと、何だか私の了承を得てほっとしたような、Yの笑顔が綻んだ。私にはあつけにとられ、Yの笑顔に自分の戸惑う笑みを重ねておりました。

卒業式は退屈に惜別をまぶして終わり、退場のとき、式には来ると言っていた長い漁から帰ったばかりの父の姿を求めました。が、目を走らせた会場には見出せません。教室に戻るまでのわずかな時間にも、これで私たちの中学時代は終わったのだとの、感傷の波が胸を洗うにまかせるばかりです。何者も抗うことのできない果敢ない時の奔流に流され、絶望の淵に流れ落ちていく思いに席でじっとしていられなくなり、私は一人窓辺に立ち、一つの記憶を辿った。

……夏のキャンプの打ち合わせの後、夕立に教室で雨宿りを余儀なくされ、昇り立つ竜と天を引き裂く雷を見ていたとき、「本当の自分」とYが語ったことが、図らずもそのとき私の胸に迫ってくるのです。

「どうしたの、Hちゃん」

声で、その人と知れました。

「何も」そう言いかけて、正門を出て行く一つの背中に気が付きました。父でした。何だ、来ていたのか……、胸をくすぐるものがあり、

「何……」

顔に笑みが浮かんだのでしよう、目敏くYが私の隣に立つのです。先立つ戸惑いに、意に反してわずかに身を引く私の鼻腔を、ふっと、柔らかなYの香りがくすぐるのです。

「いや、……親父が」

猫背気味のがに股で歩き去っていく見慣れぬ背広姿の父の後姿を、目でYに示しました。「お父様がいらしていたの。優しいのね」

窓から身を乗り出すようにして、Yは知りようもない父の背中を追うのです。

「いや、いつも家にいないから」

「お父様、漁師だっけ。大変よね」

父の仕事が大変と言いたいのか、家で留守を預かる母が大変という意味なのか、あるいはその両方なのか、判然としない同情でした。

「Yのところは、公務員だっけ」

「そう。市役所の。でも、こういう儀式がかかったことって苦手みたい。仕事を口実に、お母さんが来ていたわ。休もうと思えば、休めるのに」

父親への素直な甘えを隠さないYたち親子に、私は微笑ましい羨望を覚えました。きつと年度末で本当に忙しいんだよ、気の利いた慰めで株を上げようとする在り来たりを制するように、

「この分だと、大事な娘の結婚式にも出席しないなんて言いかねない」

そう不満を揶揄に紛らわすと、Yは悪戯っぽく笑った。Yに合わせて笑おうとするのですが、Yの口から直に結婚という言葉を聞き未遂に終わってしまい、うろたえを気取られまいとして、

「それより、何」

と、話題を転じるのがやっとなのです。

「そうそう、みんなへの配り物を運ぶの、手伝ってくれない。NじゃとIさんも、もう職員室へ行っているの」

クラス委員長のNは、苗字の最初の漢字に「じゃ」付けでよんでおりました。職員室へ向かう途中、先に行っていたIとNに行き違いました。

職員室ではブスが「来たか」といった表情で私たちを迎え、荷物をYと私に振り分ける  
と、

「Yはこれと、NとIが先に持っていったものをみんなに配っていてくれ。すまないが、H、もう一度来てくれ」

そう言うのと、ブスは机の下の文集の入った段ボール箱を指差しました。

Yを先に歩かせ、その背中に私は目で言葉にならない問いを重ねました。「え、何」……聞こえようもない声に振り向いて答えてくれやしないか、そんな笑止な願いにすら、私は真摯に待たれたのです。……

三々五々学校を後にしていく卒業生をやり過ぎ、I、S、N、そして私の四人は、お互いそれと言わず、校舎を前に名残を惜しんでおりました。下足箱の前に人影が立つのを見ると、私は素知らぬふりをして、H岳に目を向けた。

一つの季節が去ろうとしている。そうした中でも、あのH岳はずっと私たちを見守っているのだ。そう思って、臥した牛の背のようになだらかなその山容を見ているうちに、ふとした惑乱に陥った。今こうして見ているように、あの山から私たちを見ているものがありやしないか。いや、確かにかつてあの頂から、こちらの方を眺めていたものがあつた。それは私自身です。

H岳に登つたのは、小学校の遠足のとき一回きりでした。放送局の大きな中継塔が建つ広場からさらに登つた巨岩の山頂で、私はどの辺りが自分たちの町なのか、町からH岳を遠望していた自分の視線を探すように、箱庭のような海と向き合う平野を見晴らしたのです。記憶の中に立ち上がるその視線に、はからずも私は巡り合つた。あたかも、記憶という眼差しにはある種の質量のようなものがあり、時の経過に蒸散することなく、むしろ確乎とした意味の下に、ある日ある時、私たちの思惑とは関係なく甦ってくるもののように。……

そう思いが至つたとき、ふいとあの雷光を追うYの眼差しと、キャンプの夜に私を見るYの眼差しとが、はからずも私を嘉するかのように甦ってくるのです。今の別れをただ悲しみ、一步を歩み出そうとしない私の背を押すようにも。……私は、現実へ振り返りました。

「あら、Nじゃたち、帰らないの」

Yが屈託のない顔で、声を掛けてきました。

「別れを惜しんでいるわけよ」

Iがしんみりと、言いました。

「何言つてんだか。またすぐに会えるのに」

Kの見送りのことでした。Iは分かつてないなあといった呆れ顔を見せ、私たちはYたちの後から校門を出ました。

西から東へ、見ようによつては浄土から穢土へ、白い雲が流れていきます。緩い坂道をふざけ合つて下る私たちから、Ｙたちが少しずつ離れていくのに焦れながらも、私にはその絶望的な距離をどうすることもできない。やがて、大きくカーブする道の角に建つ家の陰に、Ｙたちの姿が消えてしまいました。これまでかという惜別の念に途端に口が重くなり、Ｑの話にも生返事を返すのがやつとなのです。

私たちを待ち受けているもの、それは別離でしかない。しかし、その別離を恐れて、それを受け入れなければ、これからの出会いの喜びもまたの別れの悲しみも、それらまさに生きるという実感は、空しく流砂のように指の股を零れ落ちていつてしまう。それが分かっている、やはりただ今の別れは、切実なものなのです。

と、程なく、道の先の枝道に立つ電柱に手を添えて待っているＹの姿が、私の目に飛び込んできました。私たちの姿を認めると、Ｙは笑いながら伸びをするように手を振るのです。私たちも手を振って応え、意を尽くしたような笑顔でＹが家路につくのを見送りました。見上げれば、白い雲はゆっくりと流れておりました。

## 流星

季節は確実に移り、脱皮による再生への期待よりは、未だ喪失による虚脱状態にありながらも、私とＹとの間に何の奇蹟も訪れることはないのだとの諦めが、時という清流に身を濯ぐことで、別離の痛みから少しずつ確実に癒されていくようです。が、なおも未練がましく、私はＱの影響で書き始めた拙い詩や物語にＹへの思いを求めずにおれません。そうして、短い再会までの日々は緩慢に過ぎていきました。

Ｑが就職で東京へ発つその日の午後、私は何をするにも手が付かず、遅々と零れていく時の感触に焦れておりました。本を手にとっても、言葉は意味を結びません。物語を試み、また詩作にペンを弄んでも、実感のある言葉を漁れない。また、Ｑの影響で填まりだしたクラシック音楽を聞いてみても、耳を空滑りするだけです。

約束は、夜の七時。家から駅までは、十五分もあれば行ける。しかし、五時を回るともはやじつとしていられなくなり、戻ってから晩飯を摂ることにして、私は早々に家を出た。

さて、いざそうして家を出てみたところで、私には行く当てなどありません。黄昏前の薄い翳りがようやく滲みだした道に、季節外れの幽霊のように迷いの影を曳き、去年の流し灯籠を求めるように、私は魚市場に来ておりました。

岸壁には渡ってきた奴か、越冬した奴か知れないうみねこが羽を休め、地続きの営巣する島の上にも、うみねこが乱舞している。一羽のうみねこが鳴く。すると、それが別の一

羽に伝播し、半円を描くように首を回らし、全力で命の雄叫びを上げる。岸壁は、命が猛る予感に満ちております。繋ぐ命があり、片や私は新たな分去れへと向かっている。そんな寂しい胸を、幽明相隔てる防波堤の向こうから押し寄せる忘却の波が洗うにまかせるより、私にはなす術もありません。そんな蕭条とした黄昏に私の影が浸食されていく中、今日の再会を過ぎれば、果てのない別離のあるのを思い、いつその身を忘却の泡沫として消し去ってしまったらどんなにか清々するだろうと、私は蹠踉として岸壁を伝っておりました。

岸壁を洗う、誘うような波の繰言を聞きながら、私は一つの記憶を辿っていました。それは、小学校に上がった年の夏。長い漁から帰った父は、ある日私の手を引いて外出したのです。かつてあったとも知れない父の行為に私は、遠慮と羞恥からただ気詰まりな父へどう感情を表せばいいのか知れず、ただおとなしく従うより自分を知りません。後にS海水浴場で父から泳ぎの手ほどきを受けた記憶からすると、目的は海水浴だったのでしょうか。

途中、父は船に寄り、機関を手入れし、「父の仕事」を私に見せてくれたのです。が、しかし、油臭く薄暗い機関室などに、私は興味を示せません。早く外へ出たい。ですが、自己主張するのも気恥ずかしく、その気持ちを父が汲んでくれることを願って待つばかりでした。

どれ位そこにいたものか私の記憶は、展望台にいる父と私を描き出します。船が停泊していた岸壁からその展望台までは三キロ近くあり、父一人なら四キロでも五キロでも厭わず歩く人でしたが、子供の私を連れて歩いたとは思えませんし、歩いた記憶もないのです。船の仲間に車で送ってもらったか、あるいは、父の船とS海水浴場での海水浴と、そして展望台でのことは、別の日、違う時のことであつたのかもしれない。

その展望台は、江戸時代には外国船の行き来を監視するために番屋を設けた所だといひ、先の大戦ではレーダー基地として使われたという、見た目堅牢な要塞の趣をしています。

父の仕事を見た日の出来事として記憶が描き出す展望台では、大人の腰まである壁に父に支えられて座り、崖の裾を洗う白波を飽くことなく見ている私がいまいます。すると、背後から声が私を引き止めてくる。それは、父です。

「もういいが……。いつまでも海ばり（ばかり）見ていると、その内どやしても（どうしても）そこさ（へ）行きたくなるもんだ。それが龍神様に呼ばれだつてことだアザ」

すでにそんな土地の伝承など、私は信じておりません。が、去年の夏に夜の浜辺で呼ばれた気がし、今またこの春先の海で沖から押し寄せる波に吸い込まれていきそうな耳の感じと、私は時々私を呼ぶそれぞれの声を聞いているのです。

そのとき、私は波に洗われるテトラポットに絡まる芥が、波に抗っているのを見ました。

よく見ると、それはずぶ濡れのかもめです。飛び立つこともできず、波に吞まれまいとテトラポットに這い上がるとうとしている。しかし、足が滑るらしく、虚しくテトラポットのコンクリートをかいては、波に翻弄され、うねりに浮かんでいるだけで精一杯のようです。とうとうかもめは諦めたものなのか、波の荒い岸壁を離れていきました。その体に、浮力は感じられません。

私はいたたまれず、その場を後に、でたらめに歩き出した。まるで私が溺れるかもめであるかのような忌まわしさに、また、溺れるものに何の手助けもできない無力さに、やはりあれは芥ではなかったかとの反省が、早くも私の鬼胎を除こうとしてくる。……

私は、中学校の門に立っておりました。家を出てから、すでに一時間以上経っています。約束の時間まであと三十分位。ゆっくり歩いても間に合う時間です。私は一週間前の記憶を辿り、暮れ馴染んだ坂道にYの幻を追い、Yと手を振って別れた枝道の電柱に、そっと手を添えてみました。が、それは冷たく、語りかけてくるものとてない。いたたまれず、戻って坂道を見上げても、全ては単調な青墨に墓標の影と立っているだけです。……

七時少し前に着いた駅には、すでにみんなが集まっておりました。女子がKとその母親らしい人を囲んで別れを惜しんでいました。そこにブスもいて、ブスの横にはYが……。I、S、それとNは外側にいて、一言二言Kに声を掛けているようです。私はKへの挨拶もなしに、彼らの側に寄り、旧交を確かめるように、ふざけ合いました。

やがて上り列車がやってきた。みんなはKの座る窓に集まって、代わる代わるKに最後の励ましを伝えました。私もみんなの後ろから控えめに、Kを励ましました。Kは、そんな私にも「ありがとう」と礼を言うのです。その黒い目に重なってくる幻があるのを、私は黙殺せずにはおれません。

短い警笛が、夜空に吸い込まれていった。Kが手を振って別れを告げました。ブスは、自宅のある途中駅までKたちを送るといって、私たちとはそこで別れました。

窓の明かりが走り去り、車掌室の四角い窓明かりと、その下の赤いテールランプが夜の彼方へ去っていくのを、私たちは無言で見送りました。

私の胸の昏い海に、黙殺したかもめが溺れておりました。影を払拭しようと私は、

「Kは、笑っていたな」

と、途中まで帰り道を一緒にすることになったI、Y、それとTとに同意を求めました。

「あら、気付かなかったの。……そうよねえ、あれだけはしゃいでいればねえ」

Yが、咎めるように言うのです。

「何が……」

呆れ顔でI越しに私を見るYを、私は夜を透いて直視し、不服を隠さず聞き返しました。

「泣いていたな」

Iでした。私は訝しさを隠さず、IとYの顔を交互に見ずはおれません。

「Kは、本当は東京になんか行きたくなかったのよ。できればここで、就職なり進学なりしたかったの」

Kの口を借りるように、Yが言うのです。私はYの口調に、Yが口にできずにいるKの無念をその表情に探ろうと、大胆にもYの横顔を探らずにおれません。夜を纏ったTが、Yの肩越しに私を見て、Yの言葉を引き取りました。

「Kには好きな人がいたの。結局その人には打ち明けられないまま行っちゃって……」

初めての耳に、それまで溺れるかもめとKの黒い目に鏡なす盲とした影の正体を、観取する思いがしました。黄昏の岸壁でその影を踏み、Kとの別離でその正体を現したものの、それは無常でした。

「果敢ないものだよな」

Iでした。

「何かを望んでも、それを追い求められる人間なんて、まれなのかも……」

Iの真意が掴めず、私はその横顔を訝りました。Iこそ自分の望むことを着実に実現させている。そんな思いから、危うくIを揶揄しかけた私の軽率を制したのは、Yです。

「まして、それを叶えられる人となるとね」

彼らの慨嘆が、私には分かりません。IにしろYにしろ、第一志望の高校に入学でき、順調な人生の滑り出しを見せていたからです。

「それじゃ、ここで」

「今度は同窓会でね」

YとTが、私たちに明るく別れを告げ、再会を約しました。

「Yでも思うようにならないことって、あるんだろうか」

「そりゃ、誰だってそうだろう」

何を今更と言いたげな、Iの口でした。そのそっけなさに私は、

「Iもそうなのか」

控えめに、聞いてみた。

「もちろん。おまえだってそうだろう」

私は黙っていることで、控えめな同意を示すしかありません。顔を上げることもできず、私はIと歩調を合わせるだけでした。

心ならずも東京へ出なければならなくなったK。波に翻弄されて途方に暮れていたかめ。そして、卒業式の日垣間見た容赦ない時の奔流。私は立っているのが困難なような、



気の萎えを覚えました。それを堪えてIに付いていこうとするのですが、そのIさえもが「真理を踏す言葉による置き換え」であり、それが私にはただの借り物の衣装でしかなかったとしたら……。私は迷子の心細さを、歩んでおりました。目の前では、大きな洞窟が不気味な口を覗かせているようです。入っていくよりどうしようもないその洞窟の前で、私は運命に抗っているのです。

「お、流れ星」

Iの言葉に目を上げた私が見たものは、揺るぎない、いつもの星空でした。揺るぎなく見えるこの星空にも、生と死は繰り返されているのでしょうか。私は胸に広がる深閑とした深淵に言葉が呑み込まれていき、積極的に口を開く気になれません。

「ああやって落ちていくにしても、それを支えてくれる存在があるんだそうだ」

私は、Iの横顔を訝しげに見つめ、

「支える存在……」

自分の無知を隠せません。

「神のことさ」

流れ星を探しながら、Iは言うのです。それがリルケの「HERBST」（秋）という詩の翻案であるのを知ったのは、数年後のことです。

夜空に韻律を刻む、瞬く星の届きようもない潮騒に耳を澄ましている内に、Iとの歩調を取れず少しずつ遅れていく私に、

——ほら、また……

Iの声が目覚めを促すYの声と重なって、深淵に流れる星の軌跡を示すのです。